



彼方幼稚園だより

大人になったあなたを支えるのは、子ども時代のあなたです

令和8年7月

富田林市立彼方幼稚園

園長 石田 安志



センス・オブ・ワンダー

美しいもの、未知なもの、神秘的なものに目を見張る感性

笹の葉さらさら♪七夕の短冊が風に揺れる季節となりました。これからが本格的な夏🍉園では田んぼ泥んこ遊び、色水遊び、シャボン玉、そしてプール遊びなど水を使った感覚遊びを楽しんでいます。しかしプールを嫌がる子どももいます。子どもにとって「水」は強烈な刺激の塊です。肌に感じる温度、水圧、肌にまとわりつく感覚。そして鼻から逆流する刺激。幼児期はこれらの多くの感覚情報を整理する「感覚統合」が未発達な段階です。「嫌だ」という反応は、脳がこれ以上の刺激を入れると処理しきれないよとアラートを出している正常反応です。

人類の進化において自然との触れ合いは学びの原点です。水には形がなくつかめない。重い。冷たい。この思い通りにならない自然と向き合い、水に逆らわず、流れを感じることで、教科書では学べない物理法則を学んでいるのです。大切なのは泳げるようになることよりも、力を抜いて水に逆らわなければ、もっと水をつかんでスイスイ動けるようになることを体感し、面白がることです。

海洋生物学者のレイチェル・カーソンさんは、自然体験を通じて神秘さや不思議さに目を見張る感性を「センス・オブ・ワンダー」として孫との体験を本に残しています。「知ること」は「感じること」の半分も重要ではない。という文章が心に沁みました。誰もが生まれながらに持ち、一生を支えていく秘められた感性として失くしてほしくない非認知能力（目に見えない根っこ）です。では、園や家庭においてどのように子どもに関わればこの感性が育まれるのか？

- ◎子どもが目を見張った時、子どもと同じ目線で「ホントだ！不思議だね！」と一緒に面白がる。
- ◎なぜ？をすぐに調べて正解を急いで教えずに「どうしてだろう？」と予想する時間を持つ。
- ◎「どんな匂いかな？さわってみようか？」と五感をフルに使うような声掛けをする。など

幼少期には知識を詰め込むことよりも自然や日常の小さな変化に「心が動く」体験を重ねることです。雨の日に長靴で水たまりを歩く。傘に当たる雨の音を聞く。色や形の違う石を拾う。など

日常にも発見はたくさんあります。子どもには、「何もしない時間」も必要です。何かに没頭している時にこそ集中力が育つので、そっと見守る時間も必要です。私たち大人も子どもと一緒に雨の音、虫の音、波の音、森を風が抜ける音に耳を傾ける何もしない時間を大切にしたいものです。もしかすると、それが最高の贅沢なのかもしれません。美しい光景を見て元気になったとしても美しい景色は減ったり、出し惜しみしたりしません。